The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洛星高校で授業をファシリテートしてみて
Author(s)	植田, 有策
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洛星高校で授業をファシリテートしてみて

植田有策

前期後期通して全 10 回の授業のうち私が参加したのは、6 ないし 7 回であったかと記憶しています。実際にファシリテートしたのは全 10 回の最後の回、これまでの授業の総まとめでありました。それまでの回では、私はほとんど単なる観察役になっており、得意の「ひるみ」で言葉が出ず、一向に自分の口を開けることができませんでした。授業の計画面に関しても、他の方々にまかせっきりで、他の皆さんのお役に立てなかったようにおもいます。といいつつも、授業で生徒達が議論しているのを観察していると、議論がいかに展開しているか、発言のよいところ、まずいところなど、良い議論、悪い議論が非常によく見えて来て、私自身にとっては今回の参加はとてもメリットがあるものでした。そういう意味で私はかなり生徒に近い立場にいたといえるかもしれません。

さて私が授業を担当した最終回を回想してみます。この回は、主に前 3 回、樫本さん、紀平さん、高橋さんがファシリテーターを担当した三つの議論 (各々戦争、生命、宗教) の振り返り、大きく見るとこの 1 年の授業全体の振り返りをするというものでした。そしてその振り返り自体もこれまで学んできたような議論のような形式で行うというものでありました。

普段比較的目覚めるのが遅い私としましては、朝早く起きるのは、もうそれだけで身が引き締まる思いがするのですが、当日は朝の寒さがさらに私の緊張感を高めさせました。そのため、冒頭か

ら自己紹介を忘れる、議論をするために机を丸くするのを忘れる、始まって早々いきなり高橋さん、紀平さんに助けを求める等々、凡ミスを連発していたかと思います。高橋さんの「みなさん、今日は植田君を鍛えるのに協力して下さい」という声があり、生徒達も授業通して全体的に私に協力的な空気を作っていただき、心苦しいやら有り難いやらという心境でした。誰が生徒だかわからなかったかもしれません。いや当日一番学習したのは私だったでしょう。

実際の振り返りの議論では、生徒のみなさんがかなり冴えていて、先の三つの議論のそれぞれの方法の違い、自分たちの議論においての反省、前期の授業をふまえた哲学的議論とは何か、等々についてかなり自覚的に発言がでてきていたかと思います。一方ファシリテーターはといえば、反省点について先に自分でしゃべりすぎる、ある発言があった後それに対する他の生徒達の考えを聞かずに次の話題に移ろうとする、時間配分のまずさ、など進行役として必要な技術の不足がかなり目立っていました。

しかし何はともあれこの日は紀平、高橋両先生の的確なフォローと、つたない私のファシリテートをあたたかく見守って下さってくれた生徒の皆さんのおかげで、非常に有意義に、そして楽しく議論ができたかと思います。

そしてこの日に限らず生徒達はこの授業 (私の出身高校の常識から考えると極めて特殊なこの授業) に形はさまざまであれ、前向きに参加していたかと思います。最後に私を引っぱって下さった紀平さん、高橋さん、樫本さん、この度の洛星高校関係者の皆さん、そして最終回にこの情けない男を鍛えてくれた洛星高校の生徒の皆さん、どうもありがとうございました。